

人文学・社会科学振興の在り方に関するワーキンググループの
論点に関するこれまでの主な意見

1. 総論

- Society 5.0 については、第 5 期科学技術基本計画において、サイバー空間とフィジカル空間にまたがる融合技術等を活用して社会課題を解決する社会として定義されているが、そこでは技術の活用自体が目的とされているわけではないので、人文・社会科学が役割を果たすような社会に関わる議論が不可欠となっている。
- Society5.0 については、データ独占、データ覇権主義など負の作用が進む可能性もあり、それらを含めトータルとして調和させ、よりよい社会につなげていくときに、文系、理系というものの枠を越えて、例えば、経済メカニズムと社会システムと理系のイノベーションを三位一体のものとして連携させるような取組が求められる。
- 皆が人文学・社会科学が重要だと思っているのに、うまく振興できていないとすれば何が問題なのか。課題を明らかにして、それをどうすれば解決できるかという方法の議論を行う必要がある。
- 人文学・社会科学の振興に当たって、諸学の連携、社会との連携、グローバル化という課題はあまり変わらないのではないか。だとすれば、例えば、理系との連携をさらに進めるとか、課題設定の手法を再考するなど、これらの観点を進めるためにどのようなツールで行うべきか、というレベルの議論が必要。

2. 人文学・社会科学の振興に関する主な課題と基本的な方向性

(1) 転換期における人文学・社会科学の現代的役割

- かつては科学技術の進展が社会を豊かに発展させるとシンプルに考えられていたが、富の集中や貧困化などといった問題が生じ、社会の豊かな発展と矛盾するような局面が見えるようになってきた。科学技術の進歩と人間や社会の在り方等を捉えて、新たな体系を作るということが必要になっている。
- よりよい社会を作るためには、現在所与とされているものを疑うという人文学・社会科学的な能力が社会的な意義を持つ。ややもすると、科学技術の社会実装を手伝うという位置付けだけに陥りそうになるが、それだけでなく人文学・社会科学が有する反省的に考えるというアプローチが重要となる。
- 社会的課題の解決が社会科学の役割であることは当然だが、それは役割の一部であって、むしろ未来を構想する場面では、価値の問題、あるいは、どういう社会にしたいのかなど、より能動的な役割が求められており、人文学・社会科学の意義を主張する上ではその観点が重要。未来を語るため、人社を振興するためにはどのような研究支援形態があり得るかということを議題とすべき。

- 現在は、近代を前提にした様々な学問の体系が崩壊し、かつて学問の中に存在した大きな物語が消失してしまい、個々の個別的・専門的な研究をマクロな知の体系と関連付けることが非常に難しくなっている。ここに人文学・社会科学の危機はあるのではないか。
- 人文学・社会科学の発展は、例えば政治哲学であれば「正義とは何か」、倫理学であれば「規範の基礎」、社会学であれば「共同性とは」といった、それぞれの学問分野における根源的な問いを探求しつつ、具体的な社会的課題への取組において根源的問いへの探求を深化させ、理論知を発展させるという試みを通じて展開されるものであるが、現在の人文学・社会科学ではそれが難しい状況になっている。

<特に人文学・社会科学と自然科学の連携関係>

- 政治学や行政学の観点からは、AIに社会的な意思決定をどの程度委ねるか、委任した場合の責任をどうするか、といった課題もあるが、人間への委任の場合でも同様の問題は多少なりとも起こるので、これらは全く新しい課題とは言い切れない性格もある。他方、課題が単純に切り分けできなくなっている面もあるため、技術者の社会的リテラシーも重要であり、人文学・社会科学は技術者の意思決定の質の改善にも役立つものとなることが求められる。
- AIについては、テクノロジー・アセスメント（技術の社会影響評価）の観点として、雇用への影響、データの独占の影響、セキュリティの問題など様々な課題があるが、これらはいずれも社会のコンテクストのありように依存している課題である。また、これらのマイナス面だけでなくプラス面も含めて可視化していくことが、社会が研究開発を支援して実装していく上で極めて重要。
- 遺伝子改変技術が大きく進歩しており、正の方向だけではない非常に大きな社会的影響が現実のものとして想定される時代に入った。そこでは、文系の研究者が最後のフェーズに部分的に関わるというのではなく、1つの分野としてそれぞれ分野を超えた協働で真剣に取り組む必要がある。
- 文理融合の必要性はあるものの、実行の段階ではそれ自体が目的化してしまったり、比較的解決しやすい問題に傾いて研究のスケール感を失ってしまったり、理系主導では人文系の研究者がインセンティブを持ちにくいといった課題が生じる。
- 特に人文学は理系のようにブレークダウンして研究するわけではないので、システムティックに人文学と自然科学を組み合わせることはできない。人文学の特性をどのように活かすかが重要。
- 各国の文化や宗教がどのようにそこに所属する人々の倫理に反映されるかという課題は人文学・社会科学分野の研究領域であるが、生命倫理に関する研究では、どのような研究が倫理的に可能かどうかという具体的で客観的な基準が求められるため、人文学・社会科学で実際に研究していることとつなげていくためには距離があるようにも感じる。

- 人文学・社会科学も自然科学も、それぞれの特性を変える必要はないが、お互いについてより理解する必要がある。しかし、なかなかそこまで行っていない。
- 現代社会に大きな影響を与える科学技術に対して人文学・社会科学がどのようにコミットしていくか、テクノロジーアセスメントなどのシーズプッシュ型のコミットと、社会的課題等から科学技術を再構成するニーズプル型のコミットがあるが、いずれにせよ、検討の初期段階から人文学・社会科学の研究者が参加することが大変重要であり、その初期段階では人文学・社会科学の役割の方が大きい。
- 人文学・社会科学と自然科学の連携を困難にしてきた要因を乗り越え、コミュニケーション不足を改善していくためにも、研究開発のプログラムの運営、大学における研究テーマ探索等の段階で連携の場づくり、ネットワーキングの活動等は重要。
- 文理融合研究を継続するには研究者側のモチベーションが重要。そのためには、個々のプロジェクトは研究者の自由な発想によって提案するスタイルをとる、といった方法がある。
- 他方、人文学・社会科学と自然科学双方に詳しい人材が圧倒的に不足している。分野横断型の人材育成等により、相互乗り入れする人材を育成していくことが喫緊の課題。
- 科学技術をどのようにステアリングすべきかという課題の必要性は理解されてきたが、そういったことに携わる人材は科学技術それ自体と人文学・社会的な議論の進め方などが分からないといけない。日本ではそのような人材を育成する場もその人材が就職する場も限られている。

(2) 人文学・社会科学における研究データの活用に関する展望と課題

- 社会科学ではデータ分析に基づく研究が主流になっている。中国や韓国などは政府統計等のデータが充実しているため、相手国側からしても国際共同研究が行いやすくなっている。世界で日本研究をする研究者が増えるよう、また、国際競争力のある研究の発信のため、日本でも若手を含む幅広い研究者が研究に利用できる共用データアーカイブを構築することが重要。
- エビデンスデータをどのように維持していくかが重要であり、他の研究者のデータをうまく活用するということが、今後の競争の鍵を握ることになるのは自明。そのため、人文学・社会科学のデータプラットフォームの構築は国家として取り組むべき課題。
- 自然科学と人文学・社会科学との接点として、人文学・社会科学の発展に資するエビデンスを、デジタルの力を活用してプロアクティブに作っていくという切り口は、これからの分野新興の視点を考える際にありうるのではないか。
- 現在はデータセントリックな時代なので、人文学・社会科学と自然科学が連携するときに、データがその間をつなぐものになりえる。

- 情報科学からのデジタルなアプローチがデータインフラ整備と相俟って、人文学・社会科学の研究の多様性を大きく拡げていく可能性が現実的なところまで来ている。データが揃ってくれば、そこにどのような問いを投げるかという人文学・社会科学のセンスがむしろより問われるようになる。
- 人文学・社会科学分野はデータの宝庫であり、新しい手法をより積極的に活用することがより有効と考えられる。

(3) 国際性向上

- 日本人研究者の行う研究が日本を研究対象とするテーマに限定される必要はない。現在の西洋中心的な人文学に日本の視点が入ることにより知の体系が転換する可能性や、グローバル社会の発展に向けて新しい概念や価値観を生み出す可能性などが期待できるため、国際化は重要。
- 人文学・社会科学は地域の歴史や特性等の影響を受けるものであるため、単に英語に翻訳すれば国際化するというものではないという認識を共有する必要がある。また、日本は科学技術を母国語で教育できる数少ない国の一つであり、日本だからこそその研究の価値をもっと積極的に打ち出すことができればよいと考える。
- 多様な問題意識の研究者が関わることで問題設定が先鋭化していく。このため、国際化として単に英語で発信するというところに終始するのではなく、国際的に多様な背景を有する研究者が連携しながら問題設定をしていくというプロセスが重要。
- 個人が積み重ねてきた国際的な共同研究等のノウハウを次世代に継承させるためにも、国際共同研究の拠点整備は重要。海外のトップレベルの研究者の協力を得るためには、国際的知名度のある組織を伸ばしていくことが最も効果的・現実的であり、それぞれの組織でポストの公募を行うなど、オープン性を高めつつ、伝統や個性のある国際共同研究の拠点組織を伸ばしていくことが必要。
- 人文学は研究の対象となる時代の社会の状況を遺すという記録的な価値があるので、古くなるほど価値が出るというケースがある。そういうものをタイトルやキーワードやアブストラクトだけでも英語化して国際発信することで利用度が増し、資産価値が上がる。また、そういうところに若手研究者を雇用していくことも有効なのではないか。

3. 人文学・社会科学の現代的役割を踏まえた研究支援の在り方

<未来社会を見据えた競争型プロジェクト>

- 人文学の研究者も社会に応答したいという意欲を持っているが、法人化以降各大学で研究者の研究分野が分散している中で、大学等の機関単位で研究費の申請や競争をしており、機関をまたいで、分野で一番の研究者と連携するといったことが行いにくくなっていることが課題。機関を超えた共同研究が行える仕組みが必要ではないか。

- かつては他分野の研究者同士が日常的に茶飲み話をできる余裕があったが、皆忙しくなって、そういう状況が失われている。そのような場所を意図的に作るが必要となってきたおり、それをどのような仕組みでやるかという検討が必要。
 - 研究費支援、環境整備、若手支援などがそれぞれ行われているが、それらをつなぐ仕組みとして研究者が協働するネットワークづくりが重要。若手の雇用が重要だが、人文学・社会科学ではポストクのポストが限られているといった課題があるので、そこに対する仕組みづくりという意味でも重要。
 - 人文学・社会科学の学術研究プロジェクトにおいて、根源的な問いと社会の具体的な課題の探究をつなぐ仕組み作りが重要であり、例えば、現代における社会的分断の構造の解明、国際的移動と多文化共生に関する研究などを、大勢の研究者を糾合して、5年以上のビッグプロジェクトとして行うことが有効と考えられる。
 - 今の課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業等もよいが、採択するプロセスに手間とお金がかかっている。社会の共創という点では、申請者がお互いに議論して研究テーマを決める、共創型のプロジェクトも考えられる。また、そこに産業界が資金を持って入ってくるということがあってもよい。
 - 連携プロジェクトにおいては、初期段階で時間をかけて参加者の提案を調整し、プロジェクト形成を行うことが重要。
 - 人文学・社会科学研究、特に人文学は特定の解を提示するというよりも、認識枠組みを提示するものという側面があるが、現在の JSPS の人事事業は予めの課題設定の要素がやや強くなっているようにも感じる。また、JSPS 事業の規模が小さいので、金額の規模を増やす必要がある。直ちには現実的制約があるということであれば、次善の策として、使い方の工夫で多目的に効果を発揮させることを考えるということになる。
 - JSPS 事業の 1 件当たりの支援額が小さいので、もう少し配慮してもらえるとありがたい。また、知を創発するような、人文学・社会科学にパラダイムシフトを起こすような大きな課題をむしろ積極的に設定した方がよいのではないか。
- <研究データの共同利用のための基盤整備、データサイエンスの応用促進>
- データプラットフォームはデータを一カ所にストックすることが重要で、JSPS の取組が 5 年という時限付きであるならば、それ以降の恒常的な体制についても考えていく必要がある。
 - 自然科学に比べれば人文学・社会科学のデータ量は圧倒的に少なく、比較的成本はかからないと思うが、反面データの整理や操作には人文学・社会科学の専門性が必要であるため、人文学・社会科学と情報科学が協働するためのコストが必要。
 - 古典籍のデータベースを作ることで、海外との共同研究が進んだり、あるいは文献学の在り方のようなものも非常に変わるのではないか。

4. 中長期的な検討の必要性

<評価について>

- アメリカでは社会科学研究の評価指標が自然科学と似通って近視眼的になっているため、パラダイムシフトを起こすような研究はアメリカではなくヨーロッパから出てくるということになっている。人文学・社会科学の評価方法が自然科学と同じで良いかについては、やはり十分に考える必要がある。
- 海外の質の高い論文誌に投稿しようとする、最終原稿を提出してから掲載まで3年程度要することがある。それだけ頑張っても、海外では日本語での研究成果が、日本では外国語での研究成果が評価されないため、国内外の両方で発信している人はそれぞれで研究の半分だけの評価されているようなもので、国際発信のインセンティブが乏しい。審査の厳しい海外の論文誌で出版することなどをもう少し評価する文化土壤があるとよい。
- 国際雑誌に掲載されるまで、3年程度要する。そうすると、科研費に採択され、2年目に論文を書いたとしても、論文が掲載される頃には終わってしまっている。
- 分野によってはドイツ語、フランス語で書かれることがあるので、英語以外の言語で発表することも評価されるべき。

<社会に向けた意義の発信>

- 人文学・社会科学は「役に立たなくていい」という見方がしばしば示されるが、人文学は元々教養のある良き市民になるための学問であり、社会科学も本来は実践的な学問であるため、人文学・社会科学固有の内在的・学術的な立場ないし発展を踏まえながら、社会への応答性を考えることはあって然るべきもの。
- 文系は社会に対して積極的に正の外部性があるということを訴えることが少なかったのではないかと。研究を支えている社会一般に対しては、知的好奇心に応じた研究を自由に行うということだけでは成り立たないのではないかと。ただし、その際「役に立つ」ということを狭く捉える必要はない。
- 人文学・社会科学の社会的な貢献が見えるようにするためには、①学術の最先端で行われていることを研究者自身あるいはそういう役割を担う人が一般に紹介していく、②研究者自身が学術の最先端と一般社会との関わりについて常に意識する、③他分野の人たちとの対話・交流を進める、④社会問題そのものを解決するような問題設定を研究課題に取り入れる、あるいはそれを意識して研究を進める、といったことが必要。
- 社会科学が社会的課題に貢献している例を挙げるとすれば、まず、裁判官、弁護士、公認会計士等の専門職人材の育成や、マーケティングに社会科学の知見を活用することなどがある。例えば、海外を対象とした地域研究の成果は、海外進出する日本企業の戦略的判断の精度を高めるのに貢献するなど、現実的な意味で寄与することができる。

- 社会実装に際しては経済学、コストの視点も重要。例えば医学との関係では、超高齢化と先進医療に係るコストをどのように調整していくのか、といったことも含めて検討していく必要がある。
- 人文学の成果は書籍によることが多く、AI やゲノムといった現代の科学技術に関する課題を扱ったものも増えているが、そうしたものが読まれていない。中身の問題というより、なぜ読まれないのか、デジタル革命が進む中でどのようなアプローチ、どのような発信の方法をとるべきか、考える必要がある。
- 社会のニーズを捉えて学术界につないで、社会との応答をすすめるような学術コンシェルジュのような存在が必要と感じる。また、あるテーマで行った研究について、産業界が価値を見出してくれて、その支援だけで研究を続けることができたということを経験したが、学会の評価と産業界の評価は観点が異なっているので、人文学・社会科学の研究と産業界をつなぐコンシェルジュのような存在がいると有効かもしれない。

<次世代の人文学・社会科学を担う人材の育成>

- 博士課程への進学が減少しているので、これから大学院に進む学部生などに対して発するメッセージが重要。こういう研究を目指すのが人文学・社会科学である、といった、これまでとは違うメッセージを出すことが重要。